

アンコール・ワット
の伽藍配置図
日本計量史学会理事

新井宏

十二世紀に建造されたカンボジア(クメール)のアンコール・ワットは一八六〇年にフランスの探検家アンリ・ムーオにより四百年ぶりに密林の中から発見されたことになっている。

しかし、これは正しくない。第一、一六三二年には平戸藩士だった森本右近太夫が、父の菩提を弔い年老いた母の後生を祈念するため、わざわざこの地を訪れて、素晴らしい伽藍図を残している。だから、その頃も世界の観光地であった。

さて、密林の中から突如として発見された寺院と言うと、どんなに大きくとも国会議事堂のイメージである。ちなみに国会議事堂の敷地は十ヘクタール、高さは六十六メートルである。

ところが、アンコール・ワットの敷地は二百ヘクタールで二十倍、中心部の囲内だけでも国会議事堂の敷地に匹敵し、中央祠堂の高さも六十五メートルあって、東大寺大仏殿の高さや廻廊規模とほぼ等しい。

実は、いま永年暖めていたアンコール・ワットの尺度の研究をまとめて

いるところである。ポル・ポトの支配から解放され資料も豊富になり機が熟してきたからである。

嬉しいことに、アンコール・ワットの全体配置、伽藍配置、部材など全ての測量値が、中国の尺・歩・里のように統一的に説明できそうなのである。特に中国の晋代の度制とは「ウリふたつ」である。

おそらく相互間には、なんの関係もないが、計量史ではこのような一致は珍しいことでもない。せっかくなので、隣国ベトナムに残っていた度制とともに対比表を作っ

晋代の度制			クメールの度制			ベトナムの度制		
尺	1 尺	24 cm	ht	½ ht	24 cm	to	½ to	24.4cm
	2 尺	48 cm		1 ht	48 cm		1 to	48.8cm
歩	6 尺	1.44 m	vm	3 ht	1.44 m	ta	3 to	1.46 m
	10 歩	14.4 m		10 vm	14.4 m		30 to	14.6 m
里	30 歩	43.2 m	Ω	30 vm	43.2 m			
	300歩	432 m						
			ht:hat, vm:vyama			to:thoue, ta:that		

ちなみに、復元した測地用の単位Ω(四三・二)に基づく、外濠東西の一五〇〇は35Ω、南北

一三〇〇は30Ω、最外壁東西の一〇四〇は24Ω、南北八二〇は19Ωでピタリなのである。

その他にも、主要な伽藍配置や廻廊長・桁行なども下位単位のハツト(肘尺)やビヤーマ(尋)に良く合う。調べてみれば隣国のベトナムに良く似た度制も残っていた。

このように研究は順調なだけけど、困ったこともあった。参照したアンコール・ワットの伽藍配置図が実に「いいかげん」なのである。

もちろん、観光案内書のようなものではなく、学術書に載るものばかりである。

六種類集めたが、いずれも原典の表示はないし、相互に比較してみると一致しない。例えば、第一廻廊の東西長(心々)を測ると、一九七は、二〇三は、二二二は、二七八は、二九二はとなっている。どうなっているのだろうか。

そこで、気がついたのは、伽藍図に「刺身のツマ」のように附けられている「縮尺バー」が間違えているのではないかというところである。もし、そうであれば、東西廻廊に対する南北廻廊の比率は一致するはずである。

ところが、これがまた〇・八三から〇・八七までばらつくのである。

これでは、尺度の研究どころではない。まずは、どの伽藍配置図が正しいか検証しなければならぬ。

実は、その助け船となつたのがグーグルの航空写真である。目標の標識さえあれば、一歩位の精度で追いかけることができる。軍事目的でもないのに、この精度で、無料で利用できる。便利な世の中になつたものだ。

これによって、何が間違えているかを較正できたので、論文として書き終えることができた。

振り返ってみれば、森本右近太夫の配置図だつて立派なものである。それに較べ、現代の「縮尺バー」の無法ぶりは何とかならないものであろうか。

(前韓国国立慶尚大学招聘教授、元日本金属工業常務、金属考古学、計量史)